

和歌浦天満神社の建築史的特質

鳴 海 祥 博

一 はじめに

和歌浦天満神社は和歌山市和歌浦に所在する。和歌浦湾の北側に連なる小高い山並みの中腹に、朱塗りの門と左右の回廊が建つ。遠くからもそれと分かる大胆な造形である。鳥居を潜ると自然石を敷き詰めた参道が延び、その先に見上げるような高い石垣と急峻な石段がそびえ、石垣ぎりぎりに楼門と回廊が建てられている。石段を登りつめ、楼門から振り返ると、長くのびた片男波の砂州と、遠く藤代の山々に囲まれるように和歌浦湾が広がり、絶景である。楼門をくぐるとすぐに唐門があり、瑞垣に囲われて本殿が建つ。

この天満神社は、関ヶ原の戦いの後和歌山の領主となった浅野幸長よしながが、慶長十一年（一六〇六）に再興したものである。⁽¹⁾ 当時は、全国各地で一斉に近世城郭が建設されており、石垣積みなどの築城技術が急速な発展を遂げた時

期でもあった。天満神社にみる造形は、そんな時代の技術を背景に初めて造りあげられたものに違いない。

ここでは、天満神社社殿の建築的特質を検証し、そのことの歴史的意義を考えてみたい。

二 天満神社の沿革

天満神社の創立は、寛文四年（一六六四）の奥付を持つ社蔵の『関南天満宮伝記』によると、⁽²⁾ 康保年中（九六四―九六八）に、橘直幹が和歌浦に立ち寄った折りに、菅原道真が太宰府へ向かう途中、風波を避けて和歌浦に逗留したという事跡を偲んで神籬^{ひもろぎ}を建てたことに始まるとされる。この神社草創の真偽は明らかでないが、神社の存在を確認できるものとしては、文明十一年（一四七九）の文書に「和歌之天神」と記された記録が最も古い。⁽³⁾

次に和歌山城代であった桑山重晴が天正十六年（一五八八）に荒神社を、続いて慶長四年（一五九九）に本地堂を建立した棟札が残る。⁽⁴⁾ 残念ながらこれらの建物は現存しない。

その後、慶長五年（一六〇〇）十月に浅野幸長が紀州を領して入国し、楼門、回廊、唐門、瑞垣、本殿などを再興した。本殿の建立年代は「奉造立神殿：慶長十一年丙午十一月二四日：」と記された棟札によって明らかである。本殿の臺股には「慶長九年八月二日」、「慶長十年」、高欄擬宝珠には「慶長拾乙巳年五月朔日」の銘がある。楼門は昭和十四年の修理の際に「四良兵衛甚三郎二人納て當國住人 慶長十年卯月吉日」の墨書が発見され建立年代が確認されている。神社造営は慶長九年かその前年あたりから工事に着手し、同十一年十一月に完成、遷宮されたことが分かる。末社天照皇太神宮豊受大神宮本殿、末社多賀神社本殿もこの時の建築と考えられている。⁽⁵⁾

元和五年（一六一九）、浅野氏に代わって徳川頼宣が紀州の領主となった。頼宣は元和七年（一六二一）に天満神社と谷を隔てて東へ一五〇mほどの所に東照宮を造営した。これを契機として、天満神社の神主であった安田氏は、

東照宮の社司職を兼務することとなり、江戸期を通じて天満神社は紀州徳川家の庇護を受けることとなった。⁽⁶⁾

神社には「國主命修繕之」と記された棟札が残されている。これによれば、万治元年（一六五八）、延宝五年（一六七七）、元禄十一年（一六九八）、宝永七年（一七一〇）、享保十三年（一七二八）、安永元年（一七二二）に「國主命」をもって藩が維持修繕を行っている。その後しばらく記録は途切れるが、天保六年（一八三五）から翌七年にかけて慶長以来最も大きな修理が行われた。⁽⁷⁾本殿の彩色は全面的に塗り替えられ、文様や彩色手法が変更された。⁽⁸⁾東西回廊と唐門、瑞垣は過半の部材を取り替えるほどの大規模な修理であった。この時は藩の組織を動員しての修理ではあったが、「國主命」ではなく、すでに隠居していた前十代藩主治宝の「思召」によるものであった。⁽⁹⁾幕末の万延元年（一八六〇）にはもはや藩の助力はなく、地元和歌村の人々によって修理遷宮がされている。⁽⁹⁾明治以降の修理経過は明らかでない。神社には明治三四年（一九〇一）の奉納額があるが、その年は菅公没後一千年に当たり、屋根替えなど何らかの修理が想定される。大正五年に本殿、昭和十年に楼門が国の文化財指定を受け、本殿は昭和十年と五十一年に屋根葺き替え修理、楼門は昭和十四年に解体修理を受け、今日に至っている。

三 社殿の特質

現在見られる天満神社の本殿・唐門・瑞垣・楼門・回廊は、慶長造営によって造り上げられたものである。次に、社殿の配置を含め慶長期の建築的造形の特質を探ってみたい。

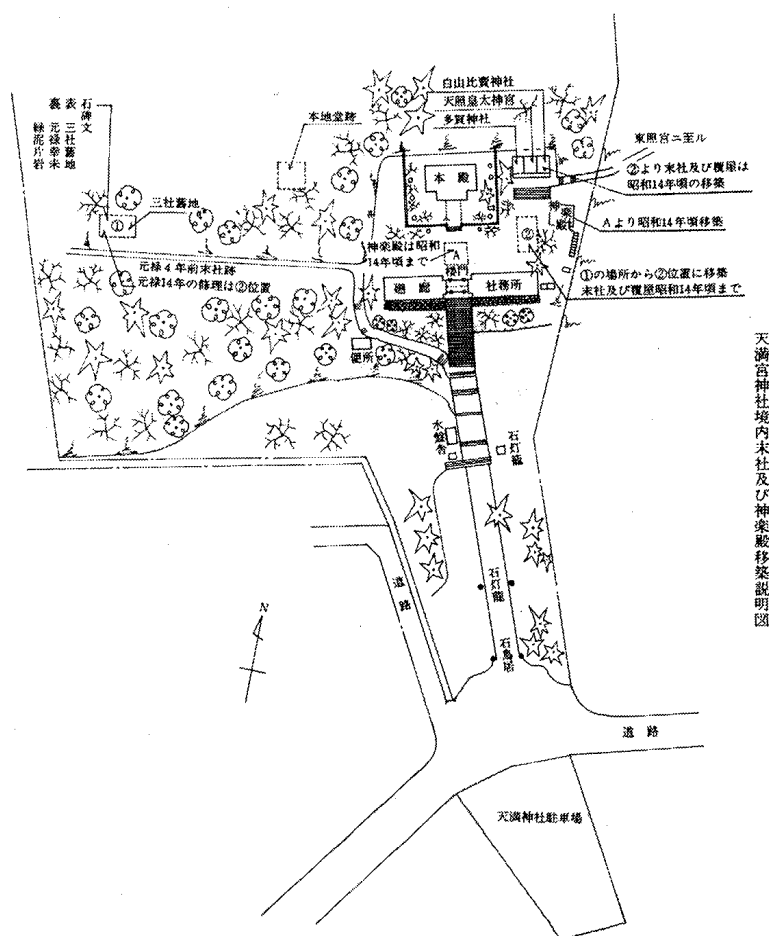
（1）社地の造成

天満神社を訪れたとき最も印象的な造形は、見上げるような高い石垣と急峻な石段、その上に建つ楼門と左右の回廊であろう。このような社地の構成が慶長期に創り出されたものなのか、あるいはそれ以前からあったものを踏

慶長造営以前の境内の様子を考える手がかりとして『関南天満宮伝記』所載の「石碑」銘文がある。⁽¹⁰⁾ この碑文は浅野幸長が儒者藤原惺窩にその撰を依頼したものとされている。この中に次のような記述がある。

従来は境内が狭かつたとしている。そして「鑿開兆域」境内を切り開いたこと、「依崖壁疊鉅石」切り立った崖に巨石を積み、「躋攀崢嶸」せいはんそうこうよじ登るように高く険しい。と述べられている。藤原惺窩の見た社頭の景観は、現在見る楼門と回廊の建つ高石垣そのものに違いない。そしてこれは社殿とともに慶長造営時に新たに造りあげられた景観であると考えられるのである。

図一 天満神社境内略図



- 64 -

なものであったと想定されよう。ところで慶長以前には荒神社と本地堂がすでに建立されている。これらは現存していないが、『関南天満宮伝記』や『紀伊名所図会』によると、荒神社は本殿の右手奥の一段高い位置、現在末社のある場所に、本地堂は本殿の左手の小高い位置にあった。本地堂跡には現在も石積みが残されている。

本殿の左右に位置する本地堂と荒神社の関係を見る限り、慶長以前の本殿も、ほぼ現状と変わらぬ位置関係にあったと想定するのが自然であろう。更に敷地の高さ関係にも注目したい。本殿と荒神社の敷地の高低差は約2m、本地堂とは約8mもの高低差がある。本殿左右のかなり近い場所に位置する末社の荒神社や本地堂が、本殿より高い位置にあるのは、社殿の配置としていささか不自然に感じられ、少なくとも同一計画の所産とは思えない。つまり、建立されて二十年に満たない本地堂や荒神社だけはそのまま手をつけず、本殿の周辺だけを大規模に造成した結果、本殿とすであつた荒神社や本地堂との敷地高さに差違が生じたのではなからうか。

それまでの狭隘な社地を拡張するために、背後の斜面を切り取り、前の谷を埋める。同時に効率よく敷地を確保するために、敷地全体も切り下げたと想定される。事実、現状の本殿周囲には平らに切りそろえられた地山の岩盤が露出している。更に、高さが七〇cm近くある本殿の亀腹基壇は、地山を削り残して造り出しとなっている。これらは、本殿の建築に先立って敷地が大規模に削平され、造成された様子を物語っている。本殿と左右の本地堂と荒神社の敷地高さはこのようにして生じたものであろう。

本殿の背後は天神山の高まりとなり、東と西には天神山から分かれた山裾が大きく南に突き出している。境内はその張り出しの付け根に当たり、本来の自然地形はやや浅い谷状の場所であつたと見られる。その谷を埋めるような格好で石垣が積まれ境内が造成されている。石垣の現状を見ると、階段のある中央付近が最も高く、東は南に突き出た峯に突き当たり、西は斜面に擦り付けるように積まれている。本殿部分の敷地の削平と正面の高石垣積みは、同時期の造成による結果と判断できる。

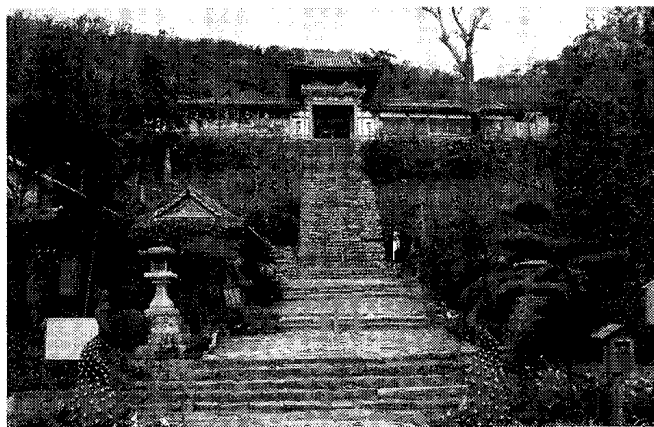
慶長以前の天満神社本殿は現在とほぼ同じ辺りにあったと推定した。周囲はより自然地形に近い傾斜地で、現在よりは高い場所に位置し、左右の本地堂、荒神社とともに、天神山中腹を東西に巡る参道沿いに社殿が並んでいたと想像できる。現在、境内から西に向かつて山腹を通る小径があり、それがかつての参道の名残かも知れない。この道を西に五〇mほど行ったあたりに「三社舊地 元禄辛未」と記された石碑の建つやや平坦な場所がある。⁽¹¹⁾現在本殿の右手奥にある末社三棟は元禄四年（一六九一）までここにあったことが判るとともに、かつての天満神社境内が山腹に添って東西に長く展開していた様子を伝えている。この三社旧地付近の小径は、慶長以前、天神山の山腹に社殿が点在していた様子を彷彿とさせる。山腹の社殿に至る経路は明らかにできないが、正面の高石垣はなく、正面向かって左側の緩やかな女坂がかつての参道を引き継いでいるのかも知れない。

（2）社殿の構成

現在の天満神社は、正面に鳥居が建ち、⁽¹²⁾参道から高い直線的な石段を登り楼門に至る。楼門の奥には平唐門が建ち、瑞垣に囲まれて本殿が建つ。⁽¹³⁾楼門と唐門の間には昭和十四年まで三間四方の拝殿が建っていた。⁽¹³⁾本殿の背後は標高八三mの天神山となる。ここでは鳥居から天神山に向かつて直線的に並ぶ社殿の配置に注目したい。

総じて神社に関していえば、構成する殿舎の種類やその配置に必ずしも定まった形式があるとは言い難い。天満神社のように、本殿・拝殿・楼門が直線的に配置される例を探してみると、和歌山県広川町所在の広八幡神社、滋賀県野洲町所在の御上神社、滋賀県甲賀町所在の油日神社、滋賀県

図－2 楼門の全景



高い石垣と急勾配な階段。その上に建つ楼門と回廊は見る者を圧倒する。

大津市の日吉大社などがある。このうち油日神社は、楼門に回廊が取り付き、本殿が瑞垣で囲われ、社殿構成としては天満神社との類似性を伺わせるが、これがどのように影響しているのかは明らかでない。⁽¹⁴⁾

しかし天満神社の社殿配置との類似で最も注目したいのは豊国神社である。豊臣秀吉を祀る豊国廟は慶長四年（一五九九）に、京都東山の阿弥陀峯の麓に西面して建てられた。社殿は豊臣氏の滅亡した元和元年（一六一五）に破却されたが、「豊国祭礼図」屏風によって社殿の様子を知ることができる。これによれば、豊国廟は秀吉を埋葬した阿弥陀峯山頂から西に延びる直線上に本殿・唐門・拝殿・楼門が配され、唐門の左右からは瑞垣が本殿を囲み、楼門の左右には廻廊が続く。しかも楼門と廻廊は石垣の上に建ち、楼門に至る直線的な石階段が設けられている。参道は更に西に延びて鳥居や南大門に続く。規模の差こそあれ、天満神社の社殿構成はこれに極めて類似している。

浅野幸長の父長政は五奉行として豊臣政権の中枢に位置していた。幸長は「豊臣朝臣」を名乗り、秀吉七回忌の臨時例祭には騎馬十疋を率いて参加している。⁽¹⁵⁾ また天満神社の造営に当たった大工堀内吉政は、豊国廟の造営に当たったと家伝の『匠明』は伝えている。⁽¹⁶⁾ この様な背景を考えたとき、天満神社と豊国廟の社殿配置の類似は偶然とは思えない。

ところで幸長は慶長十八年（一六一三）に和歌山で没し、弟の長晟が跡を継ぐ。浅野氏は元和五年（一六一九）に広島へ転封となるが、長晟は正保三年（一六四六）に広島城下の東北、二葉山の山麓に東照宮を建立した。この広島東照宮は鳥居から長い参道が延び、その先の高い石垣と直線的階段を登り詰めると、唐門と両脇に翼廊が建つ。唐門の奥には拝殿と、瑞垣に囲まれた本殿がある。ここの石垣と階段は切石積みで、中央の門も唐門形式となっているが、社地の形状や社殿の配置計画は天満神社と極めて類似している。広島東照宮の造営に際して、藩主浅野長晟の意識の中には天満神社の造形が浮かんでいたに違いない。

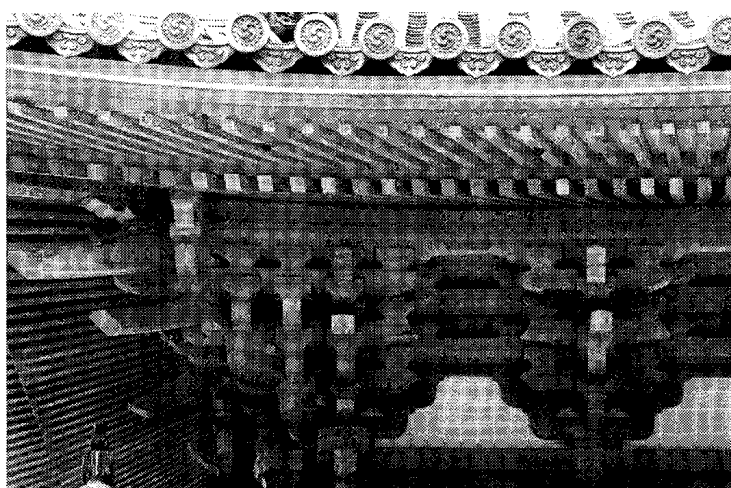
豊国廟から天満神社そして広島東照宮へと、時代の文化や造形が伝播する様をここに見ることができる。

高い石垣の上に建つ楼門の姿は、空中に浮かぶ楼閣を彷彿

とさせ極めて印象的である。形式的には一間一戸楼門で、最小単位の楼門であるが、正面の柱間は四・六m、棟高さは一〇・六mと、この種の門としては全国的にも最大規模を誇る。なお、回廊の接する楼門の両側面は仕上げられておらず、最初から回廊の存在を前提としている。

楼門の建築的特質の第一は、かなり純粹な「禪宗様」を採用していることである。十三世紀初頭、禪宗の教義とともにもたらされた「禪宗様」は「扇垂木」や「詰組組物」など、高度で煩雜な技法を持ち、今日に至るまで寺社建築の最高峰

図-3 楼門の詳細



軒を支える組物は禅宗様で、肘木の先端が独特の繰り形となっている。
垂木は隅に向かって放射状に配される「扇垂木」で、これも禅宗様の特色。
軒先の平瓦は「滴水瓦」という形式のもの。朝鮮の役で伝えられた形式の瓦とされている。
天満神社楼門は、神社建築としては特異な造形である。

の技術とされている。この時期に、禪宗寺院以外でこれほど純粹に近い禪宗様を採用した事例は今のところ見当たらない。しかも神社建築への採用となれば尚更である。この点で天満神社楼門は特筆に値する。しかしこの後、寛永九年（一六三二）の二代將軍秀忠の台徳院廟、寛永一三年（一六三六）造替の日光東照宮、承応二年（一六五三）の三代將軍家光の大猷院廟など將軍家の靈廟はすべて禪宗様式で建築されている。天満神社楼門はそれら靈廟建築に共通する、禪宗様を基調とした造形の先駆けであった。

楼門はかなり純粋な「禅宗様」を採用している、と評したが、それは取りも直さず、伝統的な純粋禅宗様とは異なる部分があることを意味している。それは次のような点である。

①頭貫先端の木鼻と、組物の拳鼻の繰り形は、それまでの禅宗様には見られない独特の曲線となっている。これは明らかにこの建築に携わった工匠が創作したデザインと思われる。

②組物を構成する「肘木」の先端は円弧を描くのが禅宗様の特色であるが、ここでは種々の繰り形を描いて切られている。禅宗様にあっても古い時代の一部の建物、例えば海南市下津町所在の善福院釈迦堂では、肘木の先端を鳥の嘴のように鋭角に切る形式のものがあって様式的特色の一つと考えられている。天満神社楼門の肘木はこの例を発展的にデザインしたものと考えられる。このデザインは十七世紀以降にも受け継がれている。

③妻飾りの虹梁下には「大斗花肘木」という形式の組物が置かれている。これは中世以来奈良県下の建物に特徴的な意匠である。楼門の造営に携わった工匠と、奈良の大工或いはその技術と深いつながりのあったことを感じさせる。禅宗様とは対極に位置する奈良系の様式が混在していることは、伝統的な技術や様式、それを伝えた工匠組織に大きな変化を来した、そんな時代を象徴しているようである。

④屋根は本瓦葺きであるが、軒先の平瓦には「滴水瓦」という朝鮮系の形式のものが用いられている。滴水瓦は通説では文禄慶長の役に際して伝えられ、慶長四年銘の熊本城のものが初期の例とされている。⁽¹⁷⁾浅野幸長 は和歌山城でも滴水瓦を採用しており、加藤清正とともに朝鮮に渡った両者が滴水瓦を採用していることは注目される。姫路城を始め近世城郭に滴水瓦を採用した例も多く、時代の求めた新しい造形であつたに違いない。

天満神社楼門のいくつかの建築的特質を拾い上げてみた。そこから見えてくるものは、新たなデザインを造りあげようとする強い意識ではなからうか。最初に楼門の特質を「禅宗様の採用」と位置づけたが、あるいは、「禅宗様」を骨格とした新しい様式の確立を目指したといえるのかも知れない。天満神社の楼門はそれほどまでに新たな建築的造形を目指したと評価できるのである。

(3) 本殿の造形

天満神社本殿は桁行き五間、梁間二間、入母屋造、正面千鳥破風付き、向拝三間、檜皮葺の建物である。本殿の建築様式は伝統的な「和様」で、大振りで肉厚のある建築彫刻や、社殿全体を彩る塗装彩色が目をひく。建築彫刻と塗装彩色は、桃山建築を特徴付ける代表的な装飾技法であるが、順を追って本殿の造形の特質を探ってみたい。

① 屋根形式

本殿の屋根は入母屋造りで正面に大きな千鳥破風を据えている。入母屋造りという屋根形式は、寺院建築では古代から一般的形式であったにも拘わらず、神社本殿にその例は少ない。重要文化財指定の神社本殿五六一棟の内、入母屋形式は八一棟で、慶長期以前の遺構例は三六棟である。入母屋形式の社殿は古来少数で、更に加えて正面に大振りな千鳥破風を据える形態も特異である。慶長期以前に建てられた社殿で千鳥破風を据える例は十七例である。この例は中世には出現しており、特に大阪府下に類例が多く地方色の様相が感じられる。天満神社本殿の場合は、大阪の地方色を受け継いだというよりは、それを荘厳手法として取り入れ、社殿の外観を豪華に飾ることを目指したと理解できる。

② 平面形態

神社本殿の正面柱間は一間或いは三間が一般的であるが、天満神社本殿は五間である。重要文化財指定の神社本殿で五間社は二五棟、それ以上の規模のもの七棟である。更に五間社以上で入母屋造りの社殿は二十棟で、神社本殿としては少数例となる。

十七世紀にまとめられた建築の技術書『匠明』では、正面の柱間が五間で流れ造りの社殿を「五間社」、入母屋造りの社殿を「五間大社」と分類している。天満神社本殿は神社建築としては特別の格式を持つ「大社」の造形と考えられていたことが分かる。

本殿内部は梁間二間の内、正面側の一間通りを外陣とし、後半部分は中央の三間をそれぞれ仕切って内陣とし、その両脇に一室を設けて、ここに阿吽の狛犬を一体ずつ安置している。『匠明』では、「五間大社」として天満神社と同一の平面図を載せ、⁽¹⁸⁾内陣両脇の空間に「ヤスミノマ」と記している。外陣と内陣両脇間は彩色で彩られている。神社本殿は本来建物内に立ち入ることを想定していないので、内部空間の構成に特別な建築的特色を持つものはほとんどなく、その点から天満神社本殿の内部荘厳は注目される。

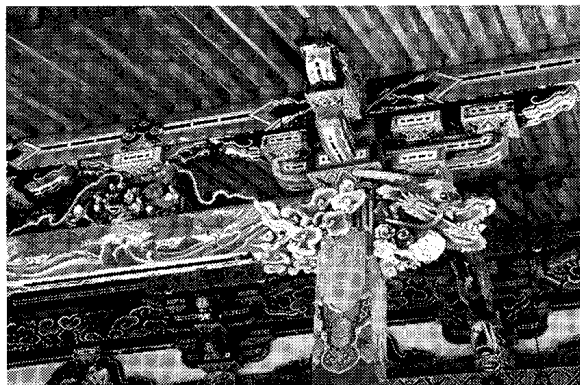
更に天満神社本殿では背面の中央に扉のあることも特異である。神社建築で背面中央に扉を構える例は、京都北野天満宮、厳島神社、京都八坂神社など九例しかない。現存しないが豊国廟でも背面中央に扉があった。⁽¹⁹⁾背面に扉を設けることにどのような宗教的意義があるのか、興味のあるところである。天満神社本殿の平面形態を見たとき、一般的な社殿とは異なる新たな造形を造り出そうという強い意識が表れているように思われる。

③装飾彫刻とその主題

桃山建築の特徴とされるものに、建築を飾る彫刻がある。天満神社本殿も時代の風潮を反映し、動植物等の姿を彫り出した多彩な彫刻で飾られている。彫刻の内容は次のようなものである。

・墓股 向拝の柱間に据える三個の墓股には、中央に「龍」（天空の支配者）右に「獅子」左に「虎」（ともに地上の王者）を、墓股の輪郭からはみ出る

図－４ 本殿の向拝



大振りな龍の彫刻は見応えがある。

図－５ 本殿の墓股



猫と蝶と牡丹、世に言う「眠り猫」である。

ほど肉厚に彫り出す。身舎の各柱間には総数十四個の幕股があり、鳳凰、麒麟、鯉など吉祥、奇瑞を表す図像に満ちている。特徴的な主題を例示すれば次のようなものがある。

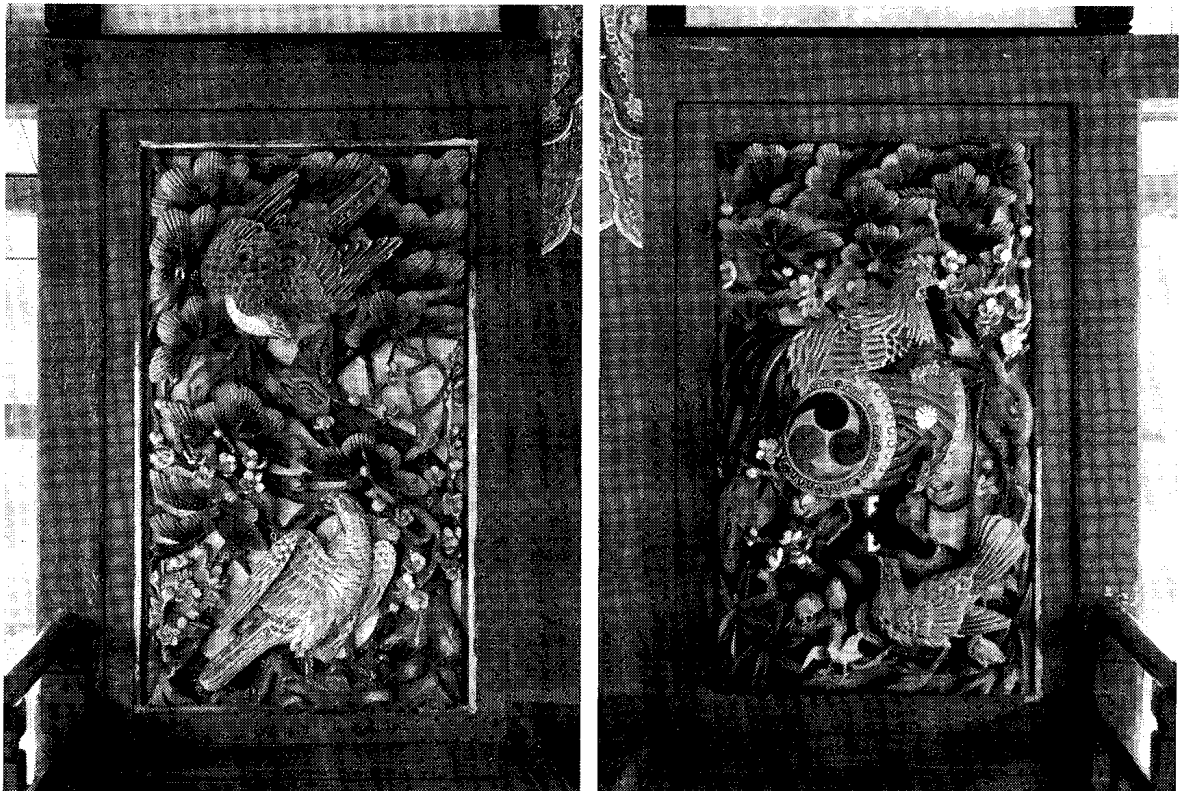
「鶴に亀に松」の彫刻、これは仙人の住む島「蓬萊山」を表す。

「猫に蝶に牡丹」の彫刻は、猫・蝶が中国で同音発音の耄（モウ・七〇歳の意）・耄（テツ・八〇歳の意）を連想し、牡丹は富を象徴するところから、合わせて富貴長寿を表す。

「瓜に長靴」の彫刻は、中国故事「瓜田に履を納れず、李下に冠を正さず」を表す。

「鹿に紅葉」は、和歌「奥山にもみじ踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋はかなしき」を主題とした図像。向拝木鼻 向拝頭貫の先端に龍頭を彫り出す。向かつて右端を阿形、左端を吽形に作る。龍頭を取り巻く雲が木鼻部分を越えて向拝柱から頭貫虹梁に取り付けられ、極めて大振りで迫力ある造形となっている。

図－6 本殿の脇障子彫刻



・向拝手挟み 向拝中央の組物には背面側に手挟みが組まれている。この手挟みには、牡丹、及び菊を彫刻するが、籠彫りと称する技法を用いて完全な立体彫刻となっている。

・根肘木 向拝と身舎を繋ぐ海老虹梁の身舎側には、これを支える根肘木が取り付けくが、この根肘木は「貌」を象った完全な丸彫り彫刻となっている。龍の木鼻とともに大振りな彫刻で見せ場となっている。

・欄間 身舎正面の中央三間は格子戸で、鴨居上の欄間に梅に鶯の彫刻を嵌め込む。菅原道真に因む主題である。

・脇障子 身舎両側面の縁には背面を区切る脇障子を建て、そこに幅六七cm、高さ一・一mの一枚板から彫り出した大振りな彫刻を嵌め込む。東側は太鼓と鶏の彫刻で、中国故事「諫鼓苔むす」を象ったもの。世の中が平安な様子、文治政策を象徴する。西側は松と鷹の彫刻で武門の力を象徴し、東西で文武が対をなす。天満神社の檀越である藩主浅野幸長の領内統治政策を示しているかのである。

・支輪板 身舎の組物は出組形式で、柱筋の通り肘木から一手出た丸桁に板支輪を架ける。この板支輪表面には雲紋を一面に浮き彫りに彫り出している。

・妻飾り琵琶板 妻飾りは、前包みの上に三斗を置いて、虹梁・大瓶束形式とするが、前包みと虹梁の間の琵琶板に、牡丹唐草を高肉に彫り出した彫刻を嵌め込んでいる。

以上の各部に施された個々の彫刻類はデザイン、彫刻技法ともに洗練され、肉厚で大振りな出来映えは、彫刻単体としても十分に見応えがある。しかしそれらが調和よく配置され、社殿の荘厳という装飾彫刻の本領が発揮されている。建物に占める彫刻類の密度、大きく盛り上がる高肉彫りの技法、手挟みに見られる籠彫りの技法、支輪に全面に彫刻を刻む手法、妻飾りに見られる組物間の琵琶板に彫刻を嵌め込む手法などは、何れも時代に先駆けた造形であった。民間伝承や故事を彫刻の主題として注目すべき特質である。

⑤木割りと省力化

前節で裝飾彫刻の特色を検証した。しかし建築物の真価は裝飾だけではなく、建築技法にもある。ここではそのことを検証したい。

天満神社本殿を見た時、実際の大きさ以上の壮大さ、安定感を感じる。このような評価は主観的で客観性に乏しいと非難を受けそうである。しかし、建物を構成する柱間寸法、内法寸法、各部材の断面寸法などを解析してみると、意外なことにそれらの寸法は、一つの柱間寸法や柱径などを基準として一定の比例関係によって構成されていることが分かる。⁽²⁰⁾ その比率の多くは黄金分割比となっている。

この部材相互の大きさを決定するシステムは「木割」と称され、寺社建築では古代から存在するとされているが、その実態は必ずしも解明されていない。そんな中であって、天満神社の造営に当たった大工堀内吉政とその子政信は、それまで経験則であり口伝であった木割技法を、理論的体系的に集成し、技術書『匠明』を著した。その精緻で充実した内容は、現存する我が国最古の建築技術書として高く評価されている。天満神社本殿の持つ美的要件は、木割技法に習熟した大工堀内吉政の周到な建築計画によって創り上げられたものと判断できる。

木割の確立は、見た目のデザインを求めただけではなく、同時に材料の規格化や、無駄を生じない合理的な材料の調達を可能にする。本来はこれが木割法の目的であった。その合理性を追求する姿勢は、天満神社の軒廻り技法にも見ることが出来る。軒廻りの部材は伝統的に曲線材を用いて構成されるものであるが、本殿では、このうち、最も部材数が多く、加工労力や材料的ロスが大きく、しかも視覚的效果の少ない垂木材（地垂木・飛檐垂木）を直線材としている。このような形式の垂木は棒垂木と称され、江戸期には一般的となる手法であるが、天満神社本殿はその最も早い例である。

伝統技法を見直して省力化を図る一方で、その労力を、視覚的效果の大きい彫刻類の充実へ振り向けようとする制作意識が感じられる。

四 まとめ―天満神社の建築史的位置付け

天満神社の慶長造営について、敷地の造成から社殿の配置、楼門と本殿の特質などについて検討を行った。その結果見えてきたものは、旧来の神社のあり方を脱却した新たな造形の出現である。石垣による大規模な社地の造成は、当時急速に発達した築城技術を背景に実現したものである。社殿の配置は豊国廟の継承を色濃く感じさせる。

本殿、楼門の建築的造形は、従来の神社建築とは大きく異なる造形を目指していることが確認できる。『紀伊続風土記』には「菅廟をかく壮麗に修造の事を始めしは豊国明神を合せ祀りしなり」とある。天満神社の造営に当たって「豊臣幸長朝臣」と称した浅野幸長がどのような意図を持っていたのか確かめようもないが、造形的には豊国廟を強く意識していたと考えて矛盾はない。

近世初頭、「霊廟建築」と称される新たな為政者の造形が出現する。それは豊国廟に始まるとされるが、天満神社の造形は、豊国廟から寛永造替の日光東照宮に至る過程の一つに位置づけることが出来る。

慶長造営時の大工「堀内七郎右衛門尉平吉政」は、家伝によると根来の出身で、京都方広寺大仏殿造営に際して「二十人棟梁」の一人となり、宝塔型の厨子を造っている。また秀吉の豊国廟の造営にも従事している。吉政の父為吉は、「聚楽第」に唐門を建て、その彫刻の出来映えが見事だったので秀吉から直々に米百俵を頂戴したという。⁽²¹⁾

吉政の子、政信は天満神社造営の翌年関東へ下り、茨城県の鹿島神宮、東照宮の元和造営などに参加している。⁽²²⁾ 寛永元年（一六二四）「平之内七郎兵衛正信」は岩出市に所在する荒田神社に江戸から自作の狛犬を寄進した。⁽²³⁾ 次いで寛永九年（一六三二）二代將軍秀忠の台徳院廟の造営に棟梁の一人として名を連ね、その年「平内越前守正信」は幕府の作事方大棟梁職に就任した。⁽²⁴⁾ これらの経歴を見ると、大工堀内氏は親子三代にわたって、常に時代の求める

造形を創り上げる場に居合わせた。

天満神社に見られる種々の先駆的な建築手法は、近世初頭を代表する造営に参画し、技術的な交流と競争と研鑽の中で培われた工匠の技を持って、初めて実現したものと確信できる。そしてそれは、中世的な建築技法や工匠組織が近世に向かう転換点でもあった。

天満神社の造形は、近世初頭の時代相を遺憾なく表したものである。

注

(1) 社殿の建立年代は棟札(社蔵)ほかの史料で確認できる。『重要文化財天満神社本殿・楼門・末社修理工事報告書』(天満神社、昭和五二年) 第四章参照。

(2) 藤本清二郎「近世初期和歌天神社考」『関南天満宮伝記』を中心に、『紀州経済史文化史研究所紀要』第27号(二〇〇六年一二月)で史料紹介されるとともに、慶長造営前後の神社の状況が論考されている。

(3) 海津一朗「『文明十一年 飛鳥井殿下向之儀式』―惣国の風景―」『和歌山地方史研究』46(二〇〇三年一〇月)による。

(4) 前掲注1修理工事報告書、第四章第二節一、『関南天満宮伝記』に棟札の写しとともに来歴が記載されている。

(5) 前掲注1修理工事報告書、第四章第二節、第三節、および『新指定重要文化財』11建造物I(毎日新聞社、昭和五六年)二三四頁

(6) 『関南天満宮伝記』所載の「当宮社司家ノ略伝」の記述による。注1参照

(7) 前掲注1修理工事報告書、第四章第二節一、に棟札の資料が掲載されている。

(8) 前掲注1修理工事報告書、第三章第二節四六―五七頁に詳細に報告されている。

(9) 前掲注1修理工事報告書、第四章第二節二、⑦参照。

(10) 前掲注2では石碑銘文の部分が省略されているが、前掲注1修理工事報告書、九一―九二頁に文書の写真が掲載されている。

(11) 『関南天満宮伝記』によると、当時、別宮伊勢両太神宮・末社多賀神社・白山比女神社は本殿の西の高い位置に建っていた。「三社舊地」がこれに当たると思われる。この三社は『紀伊名所図会』では本殿の東方に西面して建っている。昭和初期頃の社蔵の古写真でも同位置の末社が確認できる。その後、恐らく昭和十四年の楼門修理を契機に、現在の位置に再度移築された。

(12) 『関南天満宮伝記』『紀伊名所図会』によると鳥居は境内南の御手洗池の中に建っていた。現在地に移ったのは明治以降である。

- (13) 『紀伊名所図会』および昭和初期頃の社蔵の古写真で確認できる。昭和十四年の楼門修理を契機に境内の東に移築され、昭和五十年代に老朽化のため廃絶した。
- (14) 油日神社は本殿が明応二年（一四九三）、楼門廻廊が永禄九年（一五六六）、拜殿が慶長頃の建立で、楼門造営は甲良氏が手がけている。後に、平内正信とともに台徳院廟造営の棟梁で幕府の作事方大棟梁となった、甲良豊後宗広はその一門である。天満神社との類似に因縁を感じるが偶然であろうか。
- (15) 『豊国大明神臨時祭祀記録』の記述による。
- (16) 伊藤要太郎校訂『匠明』（鹿島出版会、昭和四六年）社記集五間四面大社ノ図の項に「山州東山豊国大明神…平内吉政作之」とある。『匠明』は堀内政信が父吉政の語る「古来相伝」を書き記したもので、慶長十三年（一六〇八）の奥付がある。吉政は、設計、計算、手仕事、絵様、彫り物の「五意達者」となるよう「昼夜怠らず」建物の善し悪しを見分けて工夫するよう奥書に記している。八十種類以上の寺社、書院建築の設計方法が記された我が国最初の体系的建築書。
- (17) 近年中世に遡る「滴水瓦」の発掘例が報告されているが、輸入品か国産かも含め、滴水瓦導入の経緯は今後の研究課題となっている。
- (18) 前掲注16、『匠明』社記集五間大社図に「右ノ作りヲ紀州和歌ノ天神社ニ正信作之。但表ニ唐破風ハ不致候」とある。
- (19) 前掲注16、『匠明』社記集五間四面大社ノ図の項による。
- (20) 前掲注1修理工事報告書、第三章第三節、六二―七六頁に詳述されている。
- (21) 前掲注16、『匠明』堂記集大仏殿之図、塔記集宝塔之事、社記集五間四面大社ノ図、門記集御幸門之図の各項の記載による。
- (22) 鹿島神宮所蔵狛犬銘「紀州根来 平之内正信作之 元和五巳未年卯月吉日」。日光輪王寺常行堂の棟札に「…元和五巳未年九月…棟梁平之内越前守平朝臣正信…」とある。
- (23) 荒田神社所蔵の狛犬台座に「…根来平之内七郎兵衛正信 武州江城在府之砌東国被贈者 維寛永元年極月吉日誌之」とある。
- (24) 台徳院廟の本殿床下石の刻銘に下棟梁五人の中に「平内越前守正信」とある。